

OKEN

桜建会報

2015-December No.104

日本大学桜門建築会

<http://www.okenkai.jp/>



「上州富岡駅周辺整備計画」/角館まさひで



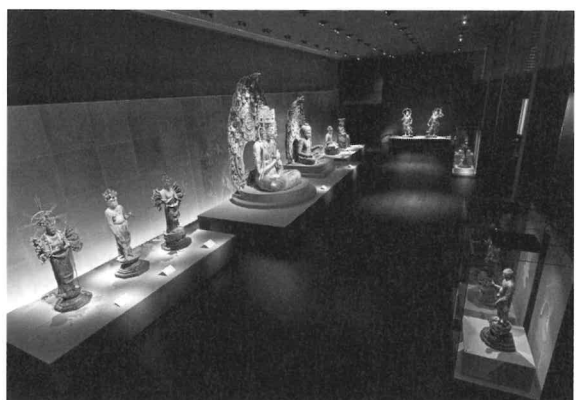
「愛川北部病院」/箱田晃一



「大林組 技術研究所 材料化学実験棟」/沼田和清



「ミューザ川崎シンフォニーホール」/小野朗



「京都国立博物館 平成知新館」/岩井達弥

contents

特集◎メールアンケート 環境エンジニアの思想——2

岩井達弥 小野朗 沼田和清 角館まさひで 箱田晃一 羽入敏樹

追悼◎川岸梅和先生——9

事務局だより——10

学部ニュース——11

環境エンジニアの思想

当誌 101 号の特集では「構造設計者の思想」と題したアンケートを試み、エンジニア個人の独自性を明らかにするものとして好評を得た。そこで、他の分野でも同じように設計や計画の背景に潜む「思想」を、社会の一線で活躍する卒業生に聞いてみることにした。今回は、環境分野（温熱環境、音環境、光環境）に焦点を当てた。環境エンジニアたちのことばの中から、建築空間を実現するための技術思想に触れ、これからの建築と技術のあり方を改めて考えるきっかけにしてみたい。（佐藤慎也／広報委員会委員長）

8つの質問

- Q1. それぞれの分野を選ぶきっかけになった建築物はなんですか。理由とともに教えてください。
- Q2. 設計者あるいは技術者として関わった建築で、もっとも気に入っているものはなんですか。
- Q3. 東日本大震災などの災害を経て、環境エンジニアリングに対する意識の変化が起きましたか。
- Q4. コンピュータの進化によって、環境エンジニアリングに対する意識の変化が起きましたか。
- Q5. 環境技術は進化を続けてきましたが、今後はどのように進化していくと考えていますか。
- Q6. 「快適な環境」とはなんですか。また、快適と感じた建築物をあげて、その理由を教えてください。
- Q7. 環境エンジニアを育てる場合、ご自身の経験の中から感じたことを提言してください。
- Q8. 日大卒業生であることが、直接的・間接的に仕事になにか影響を与えたことがありますか。

回答者



IWAI Tatsuya
1955年東京都生まれ。80年日本大学理工学部建築学科卒業。同年 TL ヤマギワ研究所入社。96年岩井達弥光景デザイン設立。梅田スカイビル、国立新美術館、豊田市美術館、日本大学理工学部駿河台校舎1号館などの照明デザインを担当。日本国際照明デザイナーズ協会理事。日本大学生産工学部建築工学科非常勤講師。2015年「京都国立博物館 平成知新館」で照明学会照明デザイン賞最優秀賞受賞。



ONO Akira
1956年東京都生まれ。78年日本大学理工学部建築学科卒業。80年同大学院理工学研究科建築学専攻博士前期課程修了。同年、永田穂建築音響設計事務所（現／永田音響設計）入社。現在、同社取締役プロジェクトチーフ。サントリーホール、紀尾井ホール、ミュゼ川崎シンフォニーホールなどを担当。98年「サントリーホールの音響設計」で日本音響学会技術開発賞を受賞。



KAKU DATE Masahide
1964年東京都生まれ。87年日本大学理工学部建築学科卒業。89年同大学院理工学研究科建築学専攻博士前期課程修了。博士（工学）。89年 TL ヤマギワ研究所、ライティングプランナーズアソシエーツを経て、2000年には、ぼんぼり光環境計画を設立。現在は、住宅、建築、都市の照明計画を行うとともに、インсталレーション、イベントなども手がけ、各地まちづくり、被災地支援に参加している。



NUMATA Kazukiyo
1965年東京都生まれ。89年日本大学理工学部建築学科卒業。同年、大林組入社、大阪本店設備部配属。93年東京本社設備設計部配属。以降、地冷施設、大学病院、清掃工場、大型業務施設、特殊用途研究施設、医薬品製造施設などの空調・衛生・用役設備の設計に従事。2014年より、本社設計本部設備設計部長。同年「大林組 技術研究所 材料化学実験棟」で空調調和・衛生工学会賞を受賞。



HAKOTA Kouichi
1965年東京都生まれ。89年日本大学生産工学部建築工学科卒業。同年、桜井システム入社。99年空間設備コンサルタント設立とともに入社し、現在専務取締役。主な設計監理は、95年山梨県立産業展示交流館アイメッセ山梨、98年亀岡市生涯学習センターガレリア亀岡、98年ミュゼ川崎基本設計、2003年山田記念病院設計監理、12年湘南第一病院設計監理など。



HANYU Toshiki
1965年新潟県生まれ。88年日本大学理工学部建築学科卒業。94年同大学院理工学研究科建築学専攻博士前期課程修了、博士（工学）。90年松下通信工業入社、97年日本大学短期大学部建設学科専任講師、准教授を経て、2013年同建築・生活デザイン学科教授。専門は建築音響。特にホール音場の解析・評価。90年日本建築学会優秀修士論文賞、95年日本建築学会奨励賞、2014年日本音響学会環境音響研究賞などを受賞。

Q1

それぞれの分野を選ぶきっかけとなった建築物はなんですか。理由とともに教えてください。

岩井 ● 建築に興味をもったのは、父が建築家だったことと、家に建築雑誌が常にあったためだと思います。子どもながらに影響を受けたのは国立代々木競技場です。小3の夏休みの工作に、段ボールで第二体育館の模型をつくった覚えがあります。就活で照明の会社に出会いました。なんとなく照明に惹かれ、そこへ入社。日本のアーキテクチャル・ライティングの師ともいべきアメリカの照明コンサルタントのクロード・エンゲル氏が担当したワシントン・ナショナルギャラリー東棟（設計／I.M.ペイ）やアナハイムのクリスタル・カテドラル（設計／P.ジョンソン）の照明計画について学ぶ機会を得て、その建築デザインのアプローチに共感し、今に至っています。

小野 ● 卒業設計で劇場をテーマにしたいと思いました。当時第二国立劇場（現／新国立劇場）の計画がもちがっていました。ちょうど自宅近くの東京教育大学（現／筑波大学）の跡地が敷地候補にあり、土地勘があることから、設計をしたいと思います。劇場研究の小谷研究室に伺いましたら、テーマが大きいためグループを組んだほうがいいと、ひとりなら音響研究室でもみてもらえと言われてきました。そこで音響研究の木村翔研究室を訪ね、当時専任講

師だった関口克明先生にお世話になることにしました。これが人生の転機となりました。木村研究室では市民会館などの音響設計の実務をしており、縮尺1/10の音響模型実験などをしていました。自分の設計よりもこの模型実験のお手伝いが主となり、卒業設計は提出したものの、その後大学院に進み建築音響の道を歩むことになりました。

角館 ● 京都の三千院やコルビュジエのロンシャンの教会などを見に行き、自然光によって、ここまで空間の豊かさを感じられるのかと思った。特にデザインに影響し、視覚的に建築を認知するための「光」を、まずは体験、経験したいと思ったのがきっかけです。

沼田 ● 毎年、当社に入社してくる学生たちとの交流の中で、彼らが建築設備技術者の道を志すことになったきっかけが、特定の建築物そのものであったという話を聞いたことがない。私を含め多くの建築設備技術者がそうであるように、大学の研究室選択時の「未成熟ではあるが本能的な価値観」のなせる業ではないだろうか。私の場合は迷走の挙句、当時の吉田燦先生の研究室の門をたたいた明確な理由は思い出せないが、担当教官に「30年ほど遅れている」といわしめた意匠センスの古さや、悪友たちの動向などをベースとし

た「消去法的かつ利根的な選択」であったような記憶がある。そこには、環境技術分野に対する確たる信念や哲学は、一切なかったのは確かである。

箱田 ● サントリーホール。確か大学3、4年だったと思いますが、東京にできたクラシック専用ホールで、たいへん話題になりました。ワインヤード型のホールも素晴らしいのですが、当時は音響設備が評価され、とても印象に残っています。建築を学ぶ自分にとって、単に建築だけではなく、素晴らしい設備が整って初めてよい建築が生まれるのだということ、身近で感じられた建築でした。

羽入 ● 建築音響の研究者になり、この分野にのめり込むきっかけとなった建築は、ウィーンにある楽友協会大ホールです。別名「黄金のホール」と呼ばれ、世界最高の美しい響きをもっていました。当時、急速に研究が進んでいた建築音響学をもってしても、これを超えるホールをつくれませんでした。つまり美しい響きの原因は、完全には解明されていなかったのです。これは同時に建築音響学が未完成であることも意味していました。私はその秘密を、自分で解明したいという強い思いに駆られました。これがこの分野の研究を本格的に志すきっかけとなりました。

Q2

設計者あるいは技術者として関わった建築で、もっとも気に入っているものはなんですか。

岩井 ● 梅田スカイビル、国立新美術館、日大理工学部1号館など思い出深いプロジェクトはいろいろありますが、あえていえば、2014年に開館した谷口吉生設計の「京都国立博物館 平成知新館」（15年照明学会照明デザイン賞最優秀賞受賞）です。私の仕事の中でもっとも多くを経験をしました。設計期間がちょうど従来光源からLEDへの移行時期だったために、日進月歩で進化するLEDの情報を収集し、一度、従来光源で行った設計をLED光源に置き換える設計をしました。これによって、おそらく日本で初めてのオールLEDの博物館が誕生しました。

小野 ● 「ミュゼ川崎シンフォニーホール」。日本を代表するワールドクラスのコンサートホールとして計画され、そ

の音響計画全般を担当しました。オープンから10年を迎え、多くの市民や音楽家から歓迎されています。コンサートホール、ウィーンフィル、ベルリンフィルと3つの名門オーケストラが1週間のうちに聴ける機会があり、それぞれの指揮者に会って、高い評価をいただきました。東日本大震災により天井が落下し、2年のブランクがありましたが、以前の響きのまま復活しました。

角館 ● 「上州富岡駅周辺整備計画」です。駅周辺整備では、通常、駅、駅前広場、道路、歩道などさまざまな発注者が管理するので、バラバラに計画されることが多い。近年は床の色などが統一される傾向がありますが、設備系はバラバラです。照明では各領域の照度基準が主ですが、ここでは、これらの空間を一体

としてとらえ、設計による空間の境界部分の防犯性、歩行性能などが満足できることを実験などで検証し、そのデータを県、市、電鉄、民間などと共有し、計画を進めることができました。その結果、駅周辺の景観的財産を可視化することにも成功。日本では照明性能設計を実現した数少ない例となりました。仕事上、住宅、病院、学校、商業施設と広い分野にわたりますが、常に人の行為をどう認知するかという連続的な課題を解決しながら計画をしています。

沼田 ● 手前味噌になるが「大林組 技術研究所 材料化学実験棟」である。温熱／空気質環境分野を専門とする建築設備技術者が成しえた「成果」の多くは意匠や構造と違い、広く一般の賞賛対象となることは稀であり、失敗時の

み多大なクレームを浴びる不毛な運命にある。この不毛地帯にあって、建築設備技術者が抛りどころとする価値観とはなにか？ この命題に対する私個人の答えは「技術的合理性の先にある美しさの追及」である。この観点から選ぶとすれば、現役時代最後に担当したこの建物ということになる。1985年の新築当時、世界一の省エネルギー事務所ビルとしてASHRAE賞を受賞したこの建物を、数々の課題をクリアしつつ最先端の化学系実験施設へとコンバージョンした。本業績は、そのコンバージョン手法と実現した高度な化学系実験環境が評価され、2014年空気調和・衛生工学会賞を受賞した。

箱田 ● 私がまだ30代の頃に設計監理を

行なった「ガレリア亀岡」です。設計は池原義郎・建築設計事務所、設備設計を私が以前勤務していた桜井システムと井上宇一研究所で行いました。中央に位置する巨大なガレリア(回廊)を空調せずにいかに自然で快適な空間にするかが最大のテーマであり、そのため、さまざまな自然換気の手法を井上先生からご指導いただきました。小さいエネルギーを使わずにどこまで快適な空間をつくることのできるかという、究極のエコ設計への挑戦でした。**羽入** ● 兵庫県宝塚市にある「宝塚大劇場」です。これは2階席バルコニーが1階客席の半分を覆い尽くすほど大きいホールです。2階席のお客さんもステージ近くで観劇できるよう配慮され

た結果でした。しかし、その代償として1階席の頭上にバルコニーが覆い被さり、ホール天井からの反射音が不足して、大ホールなのに狭い空間で聞くような音になってしまいました。そこで天井からくる反射音をバルコニーの上で測定し、バルコニーで遮られる反射音をバルコニー下のスピーカーから1階席に向けて再生しました。つまりスピーカーで反射音を人工的につくったのです。結果、バルコニー下でも大空間特有の音を実現できました。その時、反射音を解析したのは、私が大学院時代に開発した正四面体頂点法という反射音の方向を解析する手法でした。自分で研究開発したものが、実際に活かされる充実感を今でも憶えています。



左/「京都国立博物館 平成知新館」照明計画担当・岩井達弥 上/「サントリーホール」音響計画担当・小野朝

Q3 東日本大震災などの災害を経て、環境エンジニアリングに対する意識の変化が起きましたか。

岩井 ● 照明的には世の中がいつせいに暗くなったことにびっくりしました。しかし暗い状態でも空間としては機能していて、いかにそれまでの照明に無駄が多かったのかということを考えさせられました。例えば震災直後、一時的に高速道路のポール灯の照明が消されましたが、雨の日に運転していて水滴の反射が少なく運転しやすかった記憶があります。当たり前と思っていることを否定してみると、新たな面が見えてくるということを教えてくれたように思います。震災前は、オフィス照明は高照度化の一途で、全体照度を下げた必要な場所だけにスタンド照明で高照度をとる省エネ型のタスク&アンビエント照明はなかなか受け入れてもらえませんでした。今はそれらも選択肢に上るようになりました。

小野 ● 震災で被害を受けた公共施設の復旧では、ホールのような日常生活には困らない文化施設は優先順位が低いと考えられていました。しかしながら市民への意識調査では、これまで親しんできた音楽ホールの復旧を望む声が多く、天井が落ちた地域の小さな音楽ホールは1年を待たず復旧されました。音のよいホールで歌いたい、活動したい、という心の要求だったと聞いています。そして地元行政の担当者は、このホールでの市民の音楽活動が再開された時に、震災後初めて涙が出たといいます。快適な音響空間は人生の余興の場ではなく、心の栄養補給をするための施設という認識が、この辛い経験

から生まれたと話されました。

角館 ● 照明、あかりは領域を超えて影響することから、景観、まちづくりに対して関わるが多くなりました。震災復興では土木と建築がいかに融合していくかがテーマであり、特に土木の領域に対してまちづくり的アプローチを実現させるためには、環境系はひとつの切り口になります。実際、釜石ではあかりから高台避難誘導を促進し、地域の歴史的景観財産を可視化することに成功しました。今後、同様な試みを気仙沼などでも進めていきます。

沼田 ● 3.11後の計画停電騒動は、国民全体の意識に大きな変化をもたらした。騒動以降、クール/ウォームピズがより一層浸透し、照明の間引きやこまめな消灯活動などが流行した結果、設備的になんら手を加えることなく前年比-15~-20%の省エネを達成する建物(当社顧客比)が続出した。皮肉なことこの結果は、それまで多くの国民が抱いていたであろう「いずれ技術革新が起きて快適性を犠牲にしなくても大幅な省エネが達成されるはず」という無責任な幻想をいとも簡単に葬り去った。人びとは「努力や我慢をとまわらない省エネなどあり得ない」という当たり前のことに気づいたのである。以降この流れは広く深く浸透し、今日のLEDの普及、「タスク&アンビエント手法」の広がり、ファサードエンジニアリングの発達、ZEB化への挑戦など目に見えるかたちに姿を変え、2015年7月公布の「建築物のエネルギー消費性能の

向上に関する法律」に結実したと言える。

箱田 ● 震災後、設備業界でひとつのキーワードとなったことばにBCP(事業継続計画)があります。近年病院の設備設計を手がけることが多くなったこともあり、設計時には必ず問われる事項です。病院は当然ながら震災時にもその運営が要求される施設です。しかし国立病院ならまだしも民間病院では建設費が必ずしも潤沢ではなく、自ずと災害時の運用にも制限が出ます。しかしながら病院の機能はなるべく活かしたいのが施主サイドの要望であり、その取捨選択を行うのが設計サイドの業務となります。これは非常に難しい選択です。日ごろの病院の運営、特性、特殊性などを勘案しながら粘り強く施主と相談して決めます。設備設計を行うにはその運営形態、人の流れ、そして病院自体がつくるBCPに深く関わり、理解することが必要だと感じています。

羽入 ● 東日本大震災で、ある音楽ホールの天井が全面的に崩落するという大事故が起きました。幸い人的被害はありませんでしたが、ホールに携わる設計者やエンジニアにとって衝撃的な事故でした。それ以来、ホールの吊り天井が採用できなくなり、抜本的な天井構造の変革を迫られました。それと同時に音響エンジニアや研究者も「安全」を最重要事項として意識するようになりました。安全を第一に考えた上で、音響効果も得られるさまざまな天井構造が今も研究されています。

Q4 コンピュータの進化によって、環境エンジニアリングに対する意識の変化が起きましたか。

岩井 ● 少し前までは、照明効果をコンピュータ照明シミュレーションで検証するには特別な機材とソフトが必要でした。それに手間もコストもかかったので、それらを必要としない照明モデルでの検証をよく行っていました。しかしモデルをつくるには、技量や手間がかかるため、すべての空間に対応することはできませんでした。このような理由で、多くの空間では照度計算程度と照明デザイナーや照明技術者の勘と経験を頼りにしていたのです。しかし最近は、空間を手軽に立ち上げ、メーカーが提供する照明器具データを利用して簡単に照明シミュレーションができるソフトが普及しています。これを使って照明器具選択や建築ディテールの試行錯誤を繰り返し、その光の効果を確認しながら設計図書をまとめるようになりました。コンピュータの進化は、単に照明を照度で設計する時代から、光の効果を検証して設計するという意識改革を促していると思います。

小野 ● コンピュータの進化が音環境に対してもたらしたものは、音場の評価や予測などの数値解析手法であり、それらの研究が飛躍的に進歩しました。建築の設計では、コンピュータにより3次曲面など複雑な形状が容易につくると同時に、音響計画でも複雑な形状をそのまま解析できるなど、設計ツールとしてのシミュレーション手法も進化してきました。ただ私たちは、コンピュータ手法はあくまでも計画上

のツールであるということ意識しなければいけません。ややもすればコンピュータの能力を過信しがちですが、最終的には人間がその内容を見極め、判断しなくてはいけないと考えます。

角館 ● 私の大学生時代は、やっとPCが出始め、PCで画像を使うのにはまだまだのころでした。ここ数年はPCの性能が飛躍的に向上し、一般的なPCでも多様な表現が可能になってきています。私の事務所では照明シミュレーションと完成予想パース作成が比較的簡単にでき、イメージの幅が飛躍的に広がりました。「あべのハルカス」の計画では、建物全体に約6万個の光源をいろんなパターンで配置してレンダリング。この絵は、計画を進める上で共通認識をつくるのに活用されました。

沼田 ● PCの高速化によりこの10年あまり、一担当者が自席にてさまざまな非定常の計算やシミュレーションを気軽に行えるようになったことは、環境エンジニアリング業務における最大の変革であろう。中でも数値流体解析(CFD, Computational Fluid Dynamics)ソフトの発達は目覚ましい。多様な大学が研究で用いるだけでなく、建築設備技術者の実務でもCFD解析結果の提示は、顧客との「設計内容合意レベル」の向上に欠かせないものとなっている。温熱環境や空気質環境の可視化は、今まで技術者の脳内にだけ存在していたモノを、広く第三者に理解してもらうために多大な効果を発揮しており、この結果がもたらす「合意形成の深化」は、

CSスコア向上や瑕疵工事の回避に大きく貢献している。

箱田 ● 残念ながら環境エンジニアリングにおけるコンピュータ利用は、まだまだ変化が足りないと感じています。確かにビルディングオートメーションにより各設備の運転が一元化され、より省エネルギー性が追及されるようになりましたが、それは一部のことに過ぎません。さらに、より細かい空間のチューニングを、よりパーソナルに行えるよう、コンピュータ利用を考えていく必要があると感じています。設計でもCADの進歩により電子化が進みましたが、その先のBIMに対してはやはり建築に比べると未成熟と感じます。気流解析や熱環境解析などでも、もっとコンピュータを利用したプレゼンがされるべきだと思います。

羽入 ● 私が大学院生のころは、大学の大型コンピュータで音を解析するプログラムを帰宅前に実行し、翌朝大学に来るとようやく終わっているような状態でした。それが今はPCでわずか数十秒で計算できるようになりました。さらに、コンピュータグラフィックスが進化して非常に複雑な曲面形状を扱えるようになったので、昔では考えられないような複雑な形状の音楽ホールが実現できるようになってきました。これまで音楽ホールにはいくつかの型があり、そこから設計が始まるようなところがあったのですが、今後は型にとらわれない自由な発想で、さまざまな形状が生まれていくと思います。

Q5

環境技術は進化を続けてきましたが、今後はどのように進化していくと考えていますか。

岩井●進化は進んでいくとは思いますが、単に高度な技術が生き残るわけではなく、技術のヒューマンインターフェイスがその技術の進化のカギだと思います。照明でいえば明暗のコントロールだけでなく、落ち着く時は暗く、作業する時は明るくという選択は簡単ですが、最近はこのに加え、色温度も変化させることができ、その組み合わせが少し複雑になっています。これを「安らぎのあかり」とか「快活なあかり」とかいう単純なことばで選択できるようにすれば、より簡単に高度な技術を有効に使うことができます。さらにLEDは色温度だけでなく、光の色彩をも楽しめさせます。多様な色彩の光を、いろいろなシチュエーションで効果的に使うため、色彩心理とコラボした明解なインターフェイスが必要なことは言うまでもありません。

小野●コンピュータの進化により音環境における解析手法は飛躍的に進歩しました。一方で住環境や都市環境に目を向けると、建築の音環境に対する意識のあり方を変えていく必要があるように思えます。例えば教育施設の音環境に対する基準が2008年に建築学会から出されましたが、法的基準ではなく、設計者の裁量に任されていて、音の響く学校などでの学習を余儀なくされているところも多くあります。また駅舎などでも響きやすい空間で不明瞭なアナウンスを大音量で聞かされたり、新幹線の駅でも通過電車の轟音にさら

されるという現状があります。集合住宅の音の問題は、住人の最大の関心事であり、解決すべきテーマは多くあります。今後はこういった一般社会と向き合った環境技術を進化させ、意識を高めていく必要があると考えます。

角館●照明環境分野では、LEDや有機ELなどの新光源が、どんどん開発されていくと思われまます。ただ、どうしても環境系はデータ上で処理する傾向があり、個別の空間に合った快適性を評価することができていません。照明分野では進化というより、私たちが生活する上で、どんなあかりが本当に必要であるかを再確認する時期にきていると思っています。昔はろうそく一本で生活していましたよね。

沼田●3.11までは、根拠なき「技術への過信」と相まって意匠性と省エネ性のベクトルの乖離が著しく進行した時代であったといえる。例えるなら「全方位ガラス張りの透明建築に高効率かつ複雑な設備システムを導入することで、標準的な透明建築に対しCO₂排出量を35%削減した」という、分母の絶対値を無視した自作自演の時代であった。意匠設計者は「誰かが技術的に解決してくれるだろう」と考え、地球温暖化という現実から逃避していた。しかし今日、3.11をきっかけとして、モラトリアムは終焉に近づいている。今後、環境技術と建築デザインは、不可分の関係、あるいは混然一体の関係へと変化していく。省エネの方向性は

システムの高効率化から建築負荷削減へと完全に移行するだろう。設備システムはよりシンプル化、ミニマム化へ向かい、建築設備技術者には「垣根を越えた」建築デザインへのより深い関与が求められる時代が到来するだろう。

箱田●これまでの日本の環境技術は主に省エネルギー分野で大きく進歩してきたと思います。今後の方向性もこの観点が必要な比重をもって進歩する必要があります。またその技術を海外に展開できるよう、よりグローバルな社会で通用する技術の開発が必要です。それは物理的な技術だけでなく、それにとまなうFMのようなソフトの部分の技術も、より進歩する必要があります。設備設計者はその部分で、もっと深く関わる必要があるのではないのでしょうか。

羽入●エネルギー効率(省エネ)と快適性の大きく2方向に進んで行くと思います。両者は二者択一ではなく、両立させる方向に進んでいくのではないのでしょうか。音楽ホールの研究においては、音を一定に出し続けた時(定常状態)の音の分布だけでなく、音の時間変化や到来方向などが重要であることがわかってきました。音以外の気流や温度などを制御する環境技術も、定常状態を制御するだけでなく、ある程度時間的・方向的な揺らぎを加えて制御することによって、少ないエネルギーで快適な環境を実現できる可能性があるのではないのでしょうか。

Q6

「快適な環境」とはなんですか。また、快適と感じた建築物をあげて、その理由を教えてください。

岩井●「快適な環境」というのは「刺激の少ない環境」ととらえられることが多いと思いますが、生物が進化してきた過程で、自然の光は常に変化していました。太陽の光は一日の中で明るさも色温度も位置も変化しますし、季節によっても大きく変わります。雲が風で流されるような日は短時間で光が変化します。こういった変化にさらされて人は進化してきたのですから、その変化が人間にとってポジティブなことなら、その刺激を人は心地よいと感じ

じるでしょう。個人的には、軒の深い日本家屋の室内から見る庭の景色が好きです。人は動物的には弱い立場なので、本能的に自分の身を隠せる暗い場所を好みますが、見える風景は明るく周囲の状況が見渡せる場所を好みます。このように人間が進化の過程で培ったものに、快適な環境のヒントがあるように思います。

小野●快適さを意識しない空間(場)はないのでしょうか。金沢の「鈴木大拙館 思索空間」は心身ともに心地の好い

空間です。木の葉の触れる音、水の流れる音、鳥のさえずりなどの自然の音が建築という人工的な枠の中に切り取られ、借景ならぬ借音、音が料理されています。空気の流れを感じ、日の光を浴びる。晴れの日好。雨の日好。暑くも好。雪も好。

角館●ザ・リッツ・カールトン沖縄(旧喜瀬別邸)の客室、海側のレストランは大好きです。海に沈む夕日を眺望でき、変わりゆく空の色を堪能し、建築とランドスケープのあかりが浮き出してく



「長岡結婚式場」設備計画担当・箱田晃一



「上州富岡駅の照明計画」実施に向けた実験の様子。官民を含めた関係者を対象として行われた。照明計画担当・角館まさひで

Q7

環境エンジニアを育てる場合、ご自身の経験の中から感じたことを提言してください。

岩井●照明デザイナーの使命は、照明の技術的なことを背景に建築意匠や意図を踏襲した光のデザインを設計することであると教えられてきました。そのためには総合プロデューサーである建築家を始め、ともに仕事をする構造、設備、ランドスケープ、音響などの専門家はもとより、設計をかたちにする施工者とのコミュニケーション能力も欠かせないということも学びました。さまざまな人とコミュニケーションするためには照明の知識だけでなく、その領域の知識の勉強が欠かせません。要するに専門バカになってはいけません。しかし一方では、照明に関する最新技術や知識情報収集に努め、それらを十分理解して、活かせるチャンスを持つことも大切だと思います。

小野●音環境を評価、あるいはデザインする上でその物理現象を理解し、感覚を数値に置き換えて解析することにより、正確に音環境をとらえ実現させることができます。技術者はその手法を体得することが必要です。しかし実

務に携わる者は、それに留まらず、計算で求められた、あるいは機械で計測された数値だけで判断するのではなく、必ず自分の耳で聴いて、感じてみる必要があります。どのように聞こえるのか、美しいのか、不快なのか、どこから聞こえるのか、自身で感じるのが重要であり、それが仕事なのです。特にコンサートホールの室内音響計画では、人が感動する空間をつくるわけですから、いくら理屈をこねたところで、自身で感動した経験のない人にそのような空間をつくれるはずがないのです。

角館●環境はさまざまな空間をつなぐ要素となっています。特にまちづくり系での土木建築を総合的にとらえられることが、そこから空間景観へと展開していくことが可能です。環境からの視点は、都市、まち、建築を総合的にとらえることが可能となり、環境エンジニアだけではなく、多彩な対応が人材を育成することとなります。

沼田●ICT全盛の今日ではあるが、設備設計者にとっていちばん大切なもの

「選択権の付与＝クレームレス」へと変化しつつあり、持続性をとるか？ 目前の快楽をとるか？の狭間で生じる将来のリスク(不具合・クレーム)を、いかに前もって顧客に選ばせるかが最重要課題となっている。

箱田●快適な空間はその季節、個人によって多様に変化します。単に建物の空間の環境だけではなく、それをとり巻く自然の環境が大きく関与するのではないのでしょうか。私の究極の快適空間は山頂の山小屋です。都会でそんな空間をつくることは不可能かもしれませんが、そのような気持ちも少しももてる空間を設計したいものです。

羽入●私がこれまで体験した響きの中で、楽友協会大ホールに匹敵するほどの素晴らしい響きがあるのは森林です。森林の上は青空が見える開けた空間であるにもかかわらず、非常に広がりのある雄大な響きを生み出すことができます。風がそよぎ、鳥の声や木々の葉音も聞こえてきます。室内である音楽ホールとはまったく方向性の異なる「快適な環境」です。このような自然の快適性は、音だけでなく風や温熱環境など総合的なもので、自然の揺らぎももっています。環境エンジニアが自然から学ぶことはまだまだたくさんあります。

務に携わる者は、それに留まらず、計算で求められた、あるいは機械で計測された数値だけで判断するのではなく、必ず自分の耳で聴いて、感じてみる必要があります。どのように聞こえるのか、美しいのか、不快なのか、どこから聞こえるのか、自身で感じるのが重要であり、それが仕事なのです。特にコンサートホールの室内音響計画では、人が感動する空間をつくるわけですから、いくら理屈をこねたところで、自身で感動した経験のない人にそのような空間をつくれるはずがないのです。

角館●環境はさまざまな空間をつなぐ要素となっています。特にまちづくり系での土木建築を総合的にとらえられることが、そこから空間景観へと展開していくことが可能です。環境からの視点は、都市、まち、建築を総合的にとらえることが可能となり、環境エンジニアだけではなく、多彩な対応が人材を育成することとなります。

沼田●ICT全盛の今日ではあるが、設備設計者にとっていちばん大切なもの

は「職人魂」ではないか。BIMやさまざまなシミュレーションソフトなどのデジタルツールの発展には目を見張るものがあり、各種マニュアルやISOに則ったグローバルな業務遂行が当たり前の中になつたが、一向に減らない瑕疵やクレーム。多様な用途の設計や顧客を経験した今、よほど想像力の優れた人間でない限り、ヤバイ匂いを嗅ぎとり、それを本能的に回避する力は、脳みそではなく肌に宿るのだということを確認した。若者には今のうちに職人の成長に欠かせないすり傷や軽い火傷を、できるだけたくさん味わってほしいし、ケガの経験を肌に染み込ませて技術屋の勘を養ってほしいと思う。35歳くらいまでは、泥中を這うがごとくのたうちまわりながら仕事をすることを薦める。若いうちのミスなどたかが知れているし、責任は先輩がとるのだから安心して暴れてほしい。

箱田●建築は意匠、構造、設備、外構など、多様な分野の人間が関わる仕事です。他の分野をより深く理解するこ



「大林組 技術研究所 材料化学実験棟」のメカニカル・バルコニー 設備設計担当・沼田和清



「響く森林」羽入敏樹

とが環境エンジニアとして欠かせないと感じています。環境の勉強も当然必要ですが、建築、構造、土木など多くの分野を広く理解することが将来のエンジニアとしての糧になると思います。羽入●教える側にも学ぶ側にも体験が非常に大切ということです。快適な環境をつくり出すエンジニアを育てる時に、快適な環境とはなにかをことばだ

けで説明することには限界があります。教員も学生も快適な環境の体験があつて初めて成り立つようなコミュニケーションがあるように思います。最近の学生は、家に閉じこもる時間が長く、自然に触れることも少ないようです。環境エンジニアを育てるには、まず、快適な環境を体験し、感じるころから始める必要があるのかもしれない。

Q8

日大卒業生であることが、直接的・間接的に仕事になにか影響を与えたことがありますか。

岩井●日大卒業生であることは、どのプロジェクトでも同窓生がいるということは確かで、コミュニケーションのきっかけが作りやすいメリットがあります。また、建築設計に進むと同業との付き合いは少ないと思いますが、私のように照明デザイナーの場合は、いろいろな設計事務所と仕事をやるチャンスがあるので、そのたびに新たな出会いや思いがけない再会があり、同窓生ということで覚えていただいて再度仕事を依頼されたこともあります。また、後輩に照明を教える機会もいただき、今でも日大と関わり続けていることはとても幸せだと思っております。小野●日大の音環境研究室の成果は、日本国内はもとより国際的な学会でも、これまで高く評価されてきました。木村翔先生がその礎を築かれ、現在まで続く代々の先生方は常に世界の音響研究をリードし、わが国においても、環境騒音の評価、集合住宅の音環境の基準、航空機騒音の評価法、そして室内音響の評価法など、これまでさまざまな音響の分野で貢献されてきました。室内音響の研究ではいち早くコンピュータシミュレーション技術を進め実務に活かし、多くのホールの音響性能評価に応用し、それらのホールは

高く評価されています。そこで学んだわれわれはとても幸運でしたし、それに応えるように建築業界でも建設会社の研究所やエンジニアリング会社などの第一線で活躍されている卒業生は多く、現場や学会で一緒に働く機会も多く、常に刺激を受けています。それは誇らしく思うと同時に、その席末を汚す者として身の引き締まる思いです。角館●プロジェクトを進める上で、多数の分野、多数の方がたと共同作業を行います。その中で同じ理工学部であったり、同じ日大であったりという例が多々あります。主観的にみれば、早く物事が進む傾向があり、人数が多いメリットのひとつかと思っています。沼田●1989年の入社当時、当社設備職の日大出身者は数えるほどしかおらず、寂しい思いをした。空調・衛生の分野にはその成り立ちから伝統的にW大学やT大学に連なる人脈がその中心を成してきた歴史があり、大阪から東京に転勤する際に上司から頂戴したエール(?)は「お前さんは日大だから東京に行ったら苦労するぞ」というものであった。そのエールはある意味真実であったが、社内外を問わず日大出身の意匠設計者、構造設計者、現場施工担当者、あるいは行政担当者と一緒に業務を行

う機会は非常に多く、協働・調整のしやすさという点では、多大な間接的恩恵を受けたことは間違いのない。あれから20有余年、設備設計では唯一の研究室の先輩の一橋氏とともに、多くの優秀な後輩たちを当社の設備職にスカウトしてきた。今日、日大出身の設備職員数は50名を超え、各大学OB会の中で最大となった。まさに隔世の感である。箱田●同業者には日大出身者が多数います。しかし残念ながら現在仕事のつながりでは、それに対する影響はあまりありません。わが社にも優秀な日大生が多数入っていますので、将来彼らとともに、そのコネクションが活かせる時がくればと思います。羽入●大学教員としてもエンジニアとしても、仕事を通じて多くの日大卒業生と出会いました。そしてお互い日大卒業生であることで仕事が非常にスムーズに進みましたし、さまざまな場面で助けてもらいました。この人脈の広さは日大卒業生であることの最大のメリットではないでしょうか。これは日大卒業生の先輩たちが社会で活躍しているからこそ受けられた恩恵だと思っています。次はわれわれが日大卒業生として先輩同様に社会貢献し、日大の伝統を継承していく責任も感じています。

追悼

2014年度より桜門建築会の副会長を務められていた、生産工学部教授の川岸梅和先生が急逝されました。現役で活躍されていた川岸先生の遺徳を振り返り、その訃報に接した北野幸樹先生にことばを寄せていただきました。



川岸梅和先生

生産工学部教授 享年 67 歳 (2004年10月に研究室で撮影)

川岸梅和先生は本年10月16日、肺腺癌により逝去されました。享年67歳でした。

先生は、1973年日本大学生産工学部建築工学科を卒業、75年日本大学大学院生産工学研究科建築工学専攻修士課程を修了された後、日本大学生産工学部建築工学科研究生(神谷宏治研究室)を経て、76年日本大学生産工学部に奉職され、99年より教授を務められました。2015年10月16日に逝去されるまで、本学の教育、研究ならびに運営と発展に、ご尽力されました。

先生の研究領域は、建築設計、都市設計、生活・居住環境計画・デザインを中心とした横断的なものであり、多くの人材を育成するとともに、特に市民参加の公共施設づくりや居住者参加の住まいづくり、障害者や高齢者の住まいづくり、参加と協働によるまちづくり・まちそだて、ノーマライゼーションの理念に基づく福祉環境デザインなど、多面的な調査・研究に取り組み、多数の研究論文および作品を発表されています。加えて、それらの研究成果を活かした設計競技に学生とともに積極的に取り組み、国土交通大臣賞を初めとして数多くの受賞があり、その受賞数は36作品に上ります。それらの設計競技や建築作品では「共に生きる・活きる暮らし」を主たるテーマとして、取り組まれてきました。

共生ということばを出すまでもなく、ともに住むことのメリットを積極的に引き出すことと相互のバランスをとることは、集住体や生活・居住環境計画・デザインの基本的な課題でありました。とりわけコーポラティブ住宅

(居住者参加の住まいづくり)では、住まうことにはほぼ共通した思いをもつ居住者が集まり、環境を計画し、創り、育て、そして維持管理を行っていく上で居住者の参加が不可欠であり、あらゆるプロセスにおいて居住者が参加し、自らの思いやつぶやきを発し、他者と協働することが理想であると説かれていました。

また、居住者の参加と協働・協働による居住・生活環境づくりの実践プロジェクトであるCobb Hill Cohousing(バーモント州ハートランド)を初めとしたエコビレッジ型コウハウジングの調査・研究も行っていました。この研究を通して、環境共生手法・活動とともに暮らしが継承され、居住者を魅了し、結びつけるものは、その暮らしの理念「一体性、美、コミュニティ、公正、持続可能性、相乗作用」であり、自然や周辺環境と共生することは、偶然でもなければレクリエーションのためでもなく、そこに暮らす居住者が環境と調和し、そのことを暮らしの中に反映したいと思っている裏づけでもあると述べられていました。そして、日常的な時間の流れの中で、人・活動・空間が相互に浸透していく状況づくりがとても大切であることを常に説かれていました。

特に住まいづくりでは、良好なコミュニティというソフトなシステムをつくるためには、あらゆるハードが活用され、自然もコミュニティ形成の媒体となり、共用庭の樹木の育成や管理、自然を楽しむ遊びやイベントを通じて「共に生きる・活きる暮らし」に寄与する方策を、先生がご提案されてきた

作品の中にもいくつも見る事ができます。

学会・社会活動では、日本建築学会理事、代議員、関東支部役員事業幹事、並びに日本建築家協会監事、関東甲信越支部登録建築家認定評議員、東京都建築士事務所協会理事などの役職を歴任されるとともに、国や自治体の各種委員長や委員を務められました。また、NPO コーポラティブハウス全国推進協議会の監事として、コーポラティブハウジングの調査・研究並びに普及・発展にも熱心に取り組んでこられました。

学内では、日本大学評議員、建築工学科主任、建築工学専攻主任、学務担当、広報委員会副委員長、キャンパスガイド編集委員会委員長、生産工学部創設60周年学部史編纂委員会委員長などを歴任されました。また、2014年度より桜門建築会副会長を務めてこられました。このような多様な活動、業績をもつ先生を喪いましたことは、本学はもとより建築・都市設計、コーポラティブハウジングなど先生が取り組まれてこられた分野において、誠に痛恨の極みであります。

先生は「楽しみの先送り」「分かち合い」を大切にされてこられました。わたしたちに楽しみを残し、分かち合うことの大切さ、その本質をもう一度伝えようとして、このことばを遺されて旅立たれたのだと今感じています。

先生が積み重ねてこられた業績とご指導、そしてお人柄に深く敬意と感謝の意を表すとともに、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

北野幸樹(生産工学部建築工学科准教授)

事務局だより

第36回建築講座と平成27年度の特別維持会員懇親会を開催

第36回建築講座が、本年11月18日(水)18時から駿河台キャンパスで行われた。今回は、本会理事で、昨年一般社団法人日本建築士事務所協会連合会会長に就任され、会の運営に尽力されている大内達史氏をお迎えし、会長として現在取り組まれていることや、建築界を取り巻く最

近の話題についてご講演いただき、盛会に終わった。

その後19時より、同校舎1号館2階のカフェテリアで懇親会を開催。例年のように「桜建ふれあい2015」と称して、個人会員から寄せられた作品パネルを展示し、出席者75名が参加して盛会となった。

愛知県支部だより

本年6月22日(月)、桜門建築会愛知県支部総会をホテルメルパルク名古屋で開催した。総会に先立ち佐藤義信氏(日建設顧問、現 KUU.KAN 設計室主宰 S47年理工卒)の「京都迎賓館からザ・リッツカールトン京都まで」と題した講演があり、桜建会以外にも声をかけたこともあり、会場がいっぱいになった。

京都迎賓館の話題では、他のコンペ作品の案も紹介しつつ、工芸品や庭園も含めた全体の説明が展開された。ザ・リッツカールトンでは建築規制の厳しい条件下でのアイデア紹介があり、あつという間に予定の1時間が過ぎていった。

京都に行った折には、コーヒESHOPでも立ち寄ろうかと思うほ

ど、興味をひかれる話であった。

支部の総会は本学校友会愛知県支部長の筒井隆彌氏を迎え、議事もスムーズに進行し、談論風発、楽しいひとときであった。インターネットを活用し、メールアドレスなどの名簿整理が進み、今後は効率よく案内ができそうである。

文/川辺清次(支部長 S45年理工卒)

新入特別維持会員のご紹介

新規入会者 氏名/卒業年/勤務先 (平成27年6月12日~11月5日) 17名

土橋 徹	理工建 -59	森ビル(株)	柿澤 弘司	理工建 -H1	前田建設工業(株)
岡部 和正	工 -6	森ビル(株)	小峰 隆行	理工建 -H6	前田建設工業(株)
中井 覚	生産工 -55	森ビル(株)	宗 永芳	理工建 -62	前田建設工業(株)
舌津 一良	理工建 -47	学校法人上智学院	田川 亮	理工建 -56	前田建設工業(株)
窪田 正彦	生産工 -53	森ビル(株)	脇屋 仁	理工建 -61	前田建設工業(株)
富田 誠	理工海 -61	(株)松田平田設計	加藤 千晶	理工建 -H24	日本大学理工学部
高池 善方	理工建 -H12	森ビル(株)	柳澤 武志	他学部 -56	(株)柳澤商事
宮田 敦典	理工建 -H24	日本大学理工学部	石井 要憲	理工院 -H5	ダイダン(株)
布野 修司	他大学 -47	日本大学生産工学部			

桜建会報 NO.104 2015-December
 発行人 岩井光男
 編集 桜門建築会広報委員会
 〒101-8308 千代田区神田駿河台1-8-14
 日本大学理工学部内

広報委員会
 委員長 佐藤慎也(理工学部建築学科)
 副委員長 塩川博義(生産工学部建築工学科)
 大川三雄(理工学部建築学科)
 委員 山本和清(理工学部海洋建築工学科)
 亀井靖子(生産工学部建築工学科)
 プンタラ・S・ガン(工学部建築学科)
 矢代真己(短期大学部建築・生活デザイン学科)
 大西正紀(mosaki)
 西山麻夕美(フリー編集者)
 北川健太(セカイ)

桜建会事務局
 住所・所属の変更、クラス会の開催、投稿、会費、名簿など桜建会全般についてお気軽にご連絡、お問い合わせください。
 理工学部5号館7階574A号室
 TEL03-3259-0649 FAX03-3292-3216
 E-mail kaiin@okenkai.jp
 ホームページ http://www.okenkai.jp/
 専任/星野麻衣子
 非常勤/櫻井佐和、大木明子
 業務時間/AM10:00~PM5:00(月~金)

学部ニュース

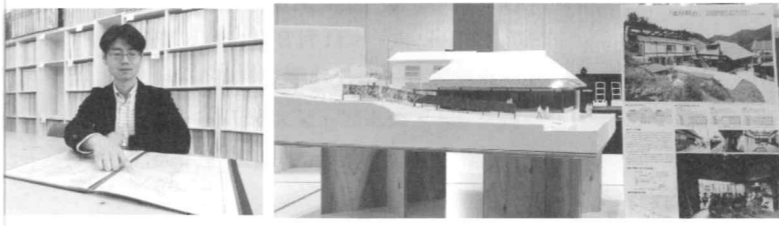
トピックス

◎山岸吉弘助教の論文「木割書に記述される柱-組物-垂木の関連について-木割の方法に関する研究(その1)」(日本建築学会計画系論文集 第77巻 第671号 2012年1月)は、2015年日本建築学会奨励賞を受賞された。

◎浦部智義准教授+浦部研究室が携わっている県内の質の高い2つの建築プロジェクト「木質構法を用いた復興住宅モデル 小規模コミュニティ型復興住宅技術モデル群-希望ヶ丘プロ

ジェクト-」と「中山間地における集会所施設とまちづくり活動 地形舞台-中山間地過疎地域に寄り添う集落づくり拠点-」が、2015年度グッドデザイン賞を受賞した。

◎齋藤俊克助教は、論文「エマルジョン処理竹補強材を用いた竹補強セメントモルタルの曲げ性状に及ぼす養生方法の影響」で、平成26年度日本コンクリート工学会(JCI)東北支部奨励賞を受賞した。



左/論文の内容を説明する山岸吉弘助教。右/浦部智義准教授と浦部研究室がつくった建築プロジェクトの模型とプレゼンボード

海洋建築工学科トピックス

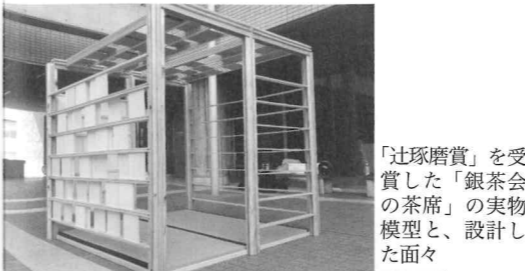
◎新宮清志名誉教授は、日本計算力学連合(JACM)から、計算力学分野における優れた業績をあげ、顕著な貢献したとの理由から、7月28日に、日本計算力学連合フェロー賞(JACM FELLOWS AWARD)を授与された。授賞式は米国サンディエゴで催行した。

◎新宮清志名誉教授は、10月21日、新潟大学駅前キャンパスで行った新潟県建築士会主催による講演会で、「シェル構造の強さと茶室空間の美的分析について」と題して、聴衆参加型の簡易実験をともなう講演をした。なお、この講演についての概要は10月22日の

「日刊建設工業新聞」に掲載された。

◎日本建築学会建築文化週間 学生グランプリ 2015「銀茶会の茶席」(主催/日本建築学会)で、志萱侑太君(修士1年佐藤信治研)/後藤翔太君(修士1年浜原研)/重田秀之君(学部4年佐藤信治研)/高橋翔君(同)/千葉雄介君(同)/中西宏直君(同)/濱嶋杜人君(同3年)の設計した作品が、実物大の模型を施工できる1次審査の上位4作品として「入選」した。この催しは、本年10月に東京都中央区の銀座通り周辺で開催される「銀茶会」の中で実際に使用される創作茶室の設計案を募集し、実際に施工までを競うコンペである。

後日行われた2次審査は、実施設計および実物大の茶室の施工を建築博物館の広場にて行い、公開審査が行われた。この作品およびその制作背景に対して、審査員のひとりである辻琢磨氏(403architecture [dajiba] 主宰)の高い評価を得て、「辻琢磨賞」を受賞した。



トピックス

◎理工学部船橋キャンパスに設置されている CST ミュージアム(日本大学理工学部科学技術史料センター)で、「特別展・日大理工のちから VIII『短期大学部(理工学部併設・船橋校舎)理工系短大の65年の実績とあゆみ』展」が開催されている。会期は7月30日(木)から2016年6月30日(水)まで。短大全体としての企画となるが、建設科として出発し、現在の建築・生活デザイン学科へと至る過程が、授業・研究の成果や機材などの変遷を通じて展示されている。

建築学科トピックス①

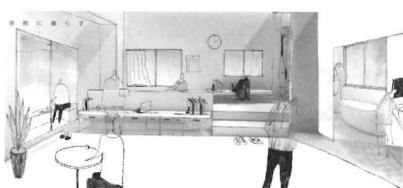
◎二瓶士門助手がディレクターを務める「マンションのランニングコストの見える化(業界初のマンションにおける環境性能を住戸ごとのランニングコストで表示する『新しい評価軸による見える化』と社内ものづくり改革システム)」が、「2015年度グッドデザイン賞」(主催/日本デザイン振興会)の「グッドデザイン・未来づくりデザイン賞(経産省商務情報政策局長賞)」を受賞した。事業主体は三菱地所レジデンス+メック eco ライフ。二瓶助手は、環境性能の評価、新たな軸の提案などシステムを主体的につくった。他に、根上彰生教授、宇於崎勝也准教授がアドバイザーを務める千葉県船橋市の「ふなばし森のシティ」の住民と企業の協働組織「森のシティ自治会」が、「2015年度グッドデザイン賞」を受賞。事業主体は、森のシティ自治会(森のシティ街づくり協議会)+野村不動産+三菱商事。根上教授、宇於崎准教授は、街づくり協議会設立以前の12年から、本地域のコミュニティ形成活動のアドバイザーを務めている。

◎「JCD インターナショナルデザインアワード 2015」(主催/日本商環境デザイン協会)で、古澤大輔助教(初山真人氏と共同)の建築作品「中央線高架下プロジェクト コミュニティステーション東小金井」が金賞を受賞した。

◎「黄金町バザール 2015 空間デザイン公募」(主催/黄金町エリアマネジメントセンター)で、佐藤慎也研究室の作品「黄金劇場」が次点に選ばれた。横浜市黄金町で開催されるアートプロジェクト「黄金町バザール」で、まさに必要な機能を付加するため、既存空間に対する提案が募集されたもの。

◎「第2回ラ・アトレ学生実施コンペ 2015」(主催/ラ・アトレ)で、修士1年の小川ルビさん(佐藤光彦研)、小関真子さん(今村研)による作品「窓際に暮らす」がゴールド賞(最優秀賞)を受賞。「すむ+かたち」をテーマに、東京都世田谷区の賃貸マンション1室の改修に対する提案で、ゴールド賞に選ばれた作品の応募者は、改修プロジェクトチームの一員として実施デザインを担当する。他に、修士1年の西島修吾君、敦賀谷俊君、村田皓平君、学部4年の小林拓生君、小山恭史君(以上、佐藤光彦研)による作品「嬉々として住まう 二枚の板が織りなす豊かな空間」がブロンズ賞と原田賞、アトレ賞を受賞した。

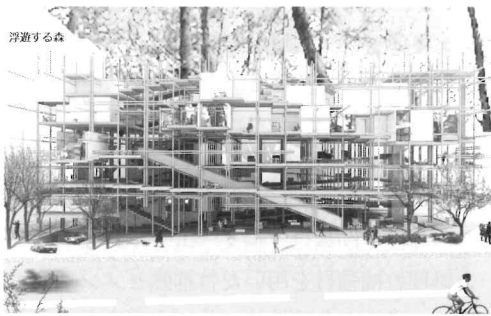
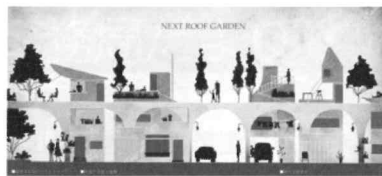
◎「第31回2015釜山国際建築大展(国際アイデアコンペティション)」(主催/韓国建築家協会釜山建築家会+日本建築家協会近畿支部)で、修士1年の中辻千尋さん(今村研)の作品「Ynaka's way and string of home」が金賞を受賞。



Ynaka's way and a string of home
share home for solitary all people -



上/「窓際に暮らす」左/「Ynaka's way and string of home」



上/「NEXT ROOF GARDEN」中/「浮遊する森」下/「機能と余白の家」



韓国・釜山市で1次、2次審査が行われ、3次審査に進んだ日本人2名、中国人2名、韓国人4名の中より選ばれた。

◎「第2回POLUS学生・建築デザインコンペティション」(主催/ポラス)で、学部4年の洞口由宇君(佐藤光彦研)の作品「NEXT ROOF GARDEN」が入選(3等)、学部3年の赤城侑真君と望月美那さんの「ある時のアポトーシス」が佳作を受賞した。テーマは「時のかさなり」。

◎「建築新人戦 2015」(主催/建築新人戦 2015 実行委員会)で、学部3年生の成潜魏君の作品「浮遊する森」(3年前期「建築設計IV」の課題「南青山コンプレックス」)が8選(第5位)に選出。これは大学などの教育機関で実施した設計課題作品を対象にするコンテストで今回は7年目。BEST100には、3年の赤城侑真君、2年の松田麻未さんも選ばれた。

◎「住宅課題賞 2015」(主催/東京建築士会)で、学部2年の伊勢萌乃さんの作品「機能と余白の家」は「審査員賞」を受賞した。「住宅課題賞」が、建築系大学37大学48学科より、設計製図科目の住宅課題の優秀作品を各校から1作品ずつ推薦し、公開審査により賞を決定する。

◎第9回JACS全日本学生建築コンソーシアム「住宅設計コンペ 2015」、テーマ「『母の家』～身近な高齢者の1人住まいを考える～」で、今村昂広君(修士2年)の「空の器」、高橋裕太君(学部4年)の「夜の家」と、卒業生の遠田拓也君(修士2年・現在、東北大学大学院工学研究科都市建築学専攻)・山下大樹君(修士1年・同)「大皿の家」が佳作を受賞した。(エントリー数406組、応募数206組、最優秀賞1点、優秀賞3点、審査員特別賞3点、佳作23作品)

◎廣田直行研究室で作成した模型2点(国立西洋美術館・東京文化会館)が、7月21日(火)～11月8日(日)の期間、文化庁国立近現代建築資料館で開催された『ル・コルビュジエ×日本 国立西洋美術館を建てた3人の弟子を中心に』で展示された。

◎11月14日(水)～23日(金)、東京駅で開催した「駅の美術館で楽しむ十日間」で、廣田研究室、亀井・渡辺研究室が京都工芸繊維大学、鹿児島大学とともに作成した丸の内のジオラマが展示された。

◎習志野市に立地・隣接する3大学(日本大学生産工学部、東邦大学、千葉工業大学)の学生による「まち・ひと・しごと」政策提案発表会(主催/習志野市)がサンロード津田沼で11月22日(日)に開催された。

◎小島陽子助教が作成指導したアンコール・ワットの建造方法のCGが、10月17日(土)のNHKスペシャル「密林に消えた謎の大都市 ～カンボジアアンコール遺跡群～」で放映された。

◎第15回「住宅課題賞 2015」で、37大学48学科の住宅課題優秀作品48の中から、伊藤優太君(建築デザインコース・学部4年)の「大久保通りを元気にする集合住宅-多様性を取り込んだ集合住宅」が優秀賞3等を受賞した。

「大久保通りを元気にする集合住宅」

